

# 社会民主主義的教育の伝統は1948年の東ドイツにおいて完全に孤立した

木内陽一<sup>\*</sup>，アンドレアス・ペーンケ<sup>\*\*</sup>，大関達也<sup>\*\*\*</sup>

(キーワード：学校改革者，脱ナチズム化，戦後東ドイツ)

## はじめに

本稿の目的は、20世紀ドイツにおけるナチズム独裁制のもとで教職を追われ、戦後東ドイツの民主主義体制では忘却され、最近になってようやく再発見された教師たちの運命を再検討することにある<sup>1</sup>。特にここでは、このような運命に遭遇した二人のザクセン教育庁役人、モーリッツ・ネストラー (1886-1976)<sup>2</sup>とカール・ルドルフ (1891-1955)<sup>3</sup>の事例が取り上げられる。彼らは1948年に職を失うとともに、その翌年にはソビエト軍事裁判所からそれぞれ懲役25年の有罪判決が下され、自由の喪失を甘受しなければならなかった。まず、この処分の実践が典型的に示していることを簡単に記しておきたい。

戦後直後の東ドイツでは、改革の努力が開始されるや、ワイマール共和国以来の古い学校機能が真っ先に激しい批判にさらされた。しかし、そうした改革の支持者たちも、1948年頃より独裁制が社会に徐々に浸透するに伴って、いわゆる社会主義的教育風土構築に際しての非追従主義者として、もはやその指導的地位にふさわしい人たちではなくなっていたのである。1930年代にスターリン主義化したソビエト教育学のより強力な受容を可能にするために、社会民主主義的教育の伝統が犠牲にされたのである。こうして社会民主主義的教育の専門家たちは教職を追われることになった。彼らの運命は重苦しい仕方で次のことを明らかにしている。すなわち、戦後直後のソビエト占領地区(SBZ)では大半の人々がなお反ファシズム的で民主主義的な国家建設を信じていたにもかかわらず、すでに早くから言論・思想統制による恐怖が蔓延していたということである。二度の独裁制によって二重に職を追われたことが、イデオロギーと不正に抵抗した二人の人生の伝記的描写を印象深いものに行っていると考えられる。

## 1 ナチスによって解雇された学校改革者たち

ドイツ人が自らなし得なかったナチズム独裁制からの解放によって、モーリッツ・ネストラーとカール・ルドルフは1945年5月によりやく愛着のある教職に復帰する可能性が開かれた。彼らはワイマール共和国時代に社会民主主義的教育政策を支持したため、1933年にナチスによって「公務員制度の再建に関する法律」(1933年4月7日)に基づいて教職を追われていた。しかしそれ以前には、彼らは改革教育学に参画したことによって、また地方自治体政治に参画したことによっても、学校改革者集団において高く評価されていたのである。二人はまず、ヴィルヘルム2世治下のドイツにおける作業学校に関する議論から教育実践のためのインスピレーションを得て、生徒の活動を促す改革教育学の端緒を授業やケムニッツ教師組合において広めていき、さらにケムニッツとグレーザにおける国民学校の教師団や、生徒の親に対しても広めていった。1920年代半ばから居住者の密度が高まるにつれて、ケムニッツにおける田園都市ガブレンツジードルンクではモーリッツ・ネストラーが、またグレーザでもカール・ルドルフが、成長しつつある者の健康を促進するという現実的な要求に合致するとともに、今日におけるコミュニティー教育の意味で、カルチャーセンターとなるような学校を建設する必要性に迫られた。ネストラーとルドルフはこのような田園都市学校に特色を与えた教育学の専門家とみなされた。彼らは当時のさまざまな問題や要求、すなわち都市の区域や工業地域、国、大陸、さらに全世界にまで及ぶ大小さまざまな問題に取り組むとともに、生徒たちやその家族のおかれている生活状況にも取り組むことを表明していた。このような教育の捉え方は、古典的改革教育学モデル—たとえばモンテッ

<sup>\*</sup>鳴門教育大学人間形成講座

<sup>\*\*</sup>グライフスヴァルト大学教育学研究所

<sup>\*\*\*</sup>兵庫教育大学大学院学校教育研究科

ソーリ教育学やヴァルドルフ教育学の教育の捉え方とは異なって、文書に書き記された組織形態や教授方法によって多かれ少なかれ閉じられた、伝統によって規定された構想を作らなかった。ネストラーとルドルフの学校改革の意図は、作業学校や共同体学校や自治学校や社会学習といった中心概念によって表すことができる。そこでは、作業学校と共同体学校の概念が統一されている。作業学校は単に、自立学習や発見学習という意味で、あるいは陶冶内容の規定という意味で、新しい発達心理学の知識に基づいた教授学的方法論の原理を意味するばかりではない。作業学校の理念には、際立った教育的な構成要素および社会・政治的な構成要素も含まれているのである。解放の意味における教育—それは改革が必要であるとみなされた既存社会に対して準備させるばかりでなく、社会的諸関係の近代化と人間化に貢献することをも明確な目的とした。民主主義的理論の自治学校に対する要求は、とりわけ次のような洞察から生じている。それは、たとえばブレームンの改革教育学者フリッツ・ガンスベルク (Gansberg, F., 1871-1952) が『民主主義的教育』(1911)で表明しており、あるいはまたアメリカ人のジョン・デューイが彼の画期的な著作『民主主義と教育』(1916)で表明していた。すなわち、民主主義社会の内部では、個々の制度も民主的に協働で形成し、共同で責任を負うことができるようにしなければならないというのである。ネストラーやルドルフの周辺にいるザクセンの学校改革者の教育学は、媒介すべき事物的能力と社会的能力の均衡のとれた関係を示しているばかりでなく、事物学習と社会学習の協働において相互に促進される能力を意識的に利用しているのである<sup>4</sup>。

## 2 戦後の教育行政上の課題はいかにして引き継がれたか

カール・ルドルフが後に報告しているように、戦後直後の1945年5月11日に、「少数の活動的な反ファシストたちが、ナチス体制の崩壊後に公職を引き継ぐために（それまでの公職の担い手たちは逃亡してしまっただけである）、あるいは現職の担い手たちを解任し、その代役を務めるために」集合した<sup>5</sup>。さらに、ケムニッツ市長からナチス役人の解雇のために委嘱されたモーリッツ・ネストラーは公文書に次のように記している。

「県教育庁役人を […] 解任し、その仕事を引き継ぐために、私はケムニッツの労働者による社会主義的な交渉委員会の構成員として委嘱された。1945年5月17日に、私はこの目的のために […] 公職に就いて問題となっている県教育庁役人や実業学校役人を訪問し、彼らに停職処分を伝えた。 […] 該当者には次のように依頼した。一つ目は、公文書には手を触れず、もはや何も指示してはならないこと。二つ目は、私物を48時間以内に持ち去ること。そして三つ目は、1945年5月19日に仕事の引き継ぎができるように準備を万全にしておくことである。1945年5月19日には事務所と戸棚の鍵を受け取った。 […] 公文書は整理されているように見えた。事務員の尋問では、違法のものは何も確認されなかった。ただエーベルト氏だけは、教師名簿において入党期限と党番号が識別できなくなっていた。ケムニッツ地方の県教育庁役人の仕事は1945年5月19日に、グレーザ出身の退職した教師カール・ルドルフに引き渡した。ケムニッツの郡長や役所の幹部は私からそのことを個人的に知らされた。彼らは委任状を閲覧した後、この措置に同意することを表明した。私はケムニッツ市の東部と西部の区域、並びにケムニッツ市の職業学校を引き継いだ。カール・ルドルフ氏はケムニッツ地方の国民学校、並びにこの区域の職業学校をも引き継いだ。このような職業学校の暫定的な管理・監督とともに、残りの学校監督区域には当分の間、関係する教育庁役人が委嘱された。こうして役所の職員は引き継がれ、さらに雇用されていった。」<sup>6</sup>

ケムニッツ市の新しい市役所の活動は1945年5月15日に始まった。ケムニッツにおける独裁制の貫徹に関するライナー・ベーリングの研究で次のことが証明された。「赤軍による占領後の第一週以来、政治的事件はきわめて広範囲にわたって外部から規定された。それに対して、地方のイニシアティブは終始一貫して抑圧されるか、さもなければ、ある仕方で誘導されたり機能を変えられたりした。そして、地方のイニシアティブは単に、中心機関からあらかじめ与えられた条件に従う地方の支部として機能するのみであった」<sup>7</sup>。後に（1973年に）モーリッツ・ネストラーは、教育庁役人として職務を引き継いだこの時代のことを次のように回想していた。

「私は1945年5月15日に名目上、教育庁役人として採用された。ドイツ共産党員は一つ一つの役所を回って、簡単に郡長を置いたり、あるいはまた、人々を押しつけ、自分たちの党員を任命したりした。そこでわれわれにとって問題になったことは、こうしたことをわれわれは社会民主主義者として受け入れられないが、われわれは管理職をも手中にするよう努力しなければならない […]、ということであった。しかし、それにロシア人たちは参加しなかった […]。学校分野ではロシア人たちがあまりにも遅れてやって来たために、リースナーは騒動を後にして次のように

述べていた。おまえだけがここでケムニッツの教育庁役人の職務を引き継ぐということには決してならないだろう、そこには少なくともなお共産党員がいる、等々と。ところで、その後もなお[1945年10月にマックス・ウーリッヒによって]共産党員が指名されており、リースナーはケムニッツにおける学校教育制度のための市職員として任命されたのである。それによって、一方では[まず]社会民主主義者が学校経営の内部に存在し、共産党員がいわゆる学校に関する事柄を担う市職員として、市の行政に従事した。確かに地方では、かつて民主主義者であった参事官エミール・メンケ・グリュッケルトが学校経営を引き受けたが、同時に彼を助けに駆けつけたのは—もはやそうすることを妨げることができなかつたのであるが—共産党員であった。こうして、この共産党員が主要な役割を演ずることになった。メンケ・グリュッケルトはすでに年配で、非常に親切な男性であった。愛すべきことに、彼は確かにしたいことを知っていたし、ドレスデンの文部省にいたのだが、その地位を確保することができずに、ザクセンの学校制度をただ名目上、引き受けたにすぎなかつた。それに対して、共産党員はそのそばで実際にすべての地方を指導していた。ケムニッツにおける私のところでは、かつて学校経営が、大都市では評議会の評議員から構成され、地方ではそのつどの郡長や専門家から構成されていた。そして、これこそが教育庁役人だったのである。これを教育庁役人と名づけることについて、かつてはまったく異論がなかつた。二つの監督官庁は、採用その他の書類に署名をしていた。こうして、リースナーは権力を得ようとして、次のように述べていた。私こそが権力を得ようとして振舞った張本人であると。1947年ごろ、リースナーと私とのあいだには非常に鋭い対決が生じていた。]<sup>8</sup>

ネストラの課題領域の一部に数えられたことは、まず、1945年5月にケムニッツで彼が単独で行う学校教育の管理の短い時期のあいだに、ケムニッツで1945年3月5日から6日までに行われた激しい爆撃のために、完全に機能が停止した学校経営を再生させることであった。1944年から1945年までに行われた合計12回の空襲によって都市の大部分が廃墟となったように、都市のすべての学校制度も打撃を受けた。航空爆雷や破裂弾や焼夷弾は多数の学校建築のすべて、もしくは相当な部分に損害を与えた。他方でまた、他の学校は傷病兵のための野戦病院、もしくは損害を受けた病院の待避宿舎へと機能を変えなければならなかつた。それゆえに、モーリッツ・ネストラにとってとりわけ重要だったことは、学校建築物の正確な状態を確認し、経験のある信頼できる教師に学校経営の再開のための準備に対する責任を負わせることであった。地方教育庁役人カール・ルドルフは職務の引継ぎに伴って、「初日や第一週に自転車で彼の新しい郡におけるすべての場所を訪問し、学校の状態について知らせた。そして彼は市長と話し合い、しだいに形成された反ファシズムの連合体から、個々の教師についての鑑定書を要求された。その際に、彼はすぐに、なお存在していた以前のすべての校長と、彼が知っていたすべてのナチ活動家—全部で89人—を解任し、残りの教師に、学校を掃除して、どのような生徒がいるのかを確認して、授業が再開できるように準備するよう依頼した」<sup>9</sup>。

モーリッツ・ネストラとカール・ルドルフは教育庁役人として、早速、とりわけナチスによって教職から押しやられた学校改革者を校長に任命した<sup>10</sup>。学校教育の管理、学校経営、同僚教師、生徒集団、とりわけ父兄にとっての焦眉の課題は、授業再開のための土台を作るために、瓦礫の除去と建物の安全確保を進めることであった。こうして、とりわけ市長はすでに1945年5月22日に、教師は教育庁役人の指導の下で戦争によって生じた学校における破損物を除去し始めるよう指示した。1945年6月18日に教育庁役人は、新しく任命された校長に11歳から14歳のあらゆる生徒に第二次世界大戦の廃墟の原因を説明し、瓦礫除去作業に動員するよう依頼した。さらに1945年7月7日の教育庁役人の命令によって、14歳のあらゆる生徒は毎日5時間、学校もしくは他の市立施設で働くことを義務づけられた。そうしない生徒は食糧配給切符を受け取ることができなかつた<sup>11</sup>。教師や父兄ならびに子どもや青少年は、瓦礫の学校を片づけて、屋根や窓の大部分を簡単に修理した。その際、材料不足のために、学校の修復作業は遅れた。とりわけ困難だったのは窓ガラスの調達であった。しばしば一時しのぎに、厚紙が窓枠に取り付けられなければならなかつたのである。

### 3 教職における脱ナチズム化はいかにして実行されたか

さらなる主要な任務は、行政や学校経営からできるだけ早く解消されるべきであったが、以前に自分がナチスであることをきわめて野心的に表明していた教師を教職から追い払うことと結びつく。結局、教師の大部分は国家社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)の構成員であるか、もしくはその支部の一人であった。それによって、ソビエト占領地区における教師集団のほぼ全面的な交代が始まった。なぜなら、およそ2万8千人の教師のうち約72パーセントがドイツ国家社会主義労働者党(NSDAP)に入党しており、ほぼ97パーセントが国家社会主義教師同盟(NSLB)に参加していたからである。確かにに会員資格の強制はなかつたが、教師集団への圧力は非常に大きかったため、そこか

ら逃れることができたのは副専攻においてか、もしくはきわめて冷遇されることによるのみであった<sup>12</sup>。ケムニッツ東部だけでも1944年8月11日に国民学校や特殊学校の教師446人のうち388人がナチ党の構成員であった。それは86.99パーセントに相当するとともに、後のソビエト占領地区—そこでは一般教養学校の教師3万9千348人のうち2万8千179人(71.62パーセント)が国家社会主義労働者党(NSDAP)に所属していた—の全領域に比べて高い数字であった。さらに重要なことは、あらゆるナチズム的要素が教科課程から徹底的に取り除かれたことである。ナチ・システムを機能させたことに対する教育学の共同責任をめぐって行われた批判的な取り組みをも含むこうした課題領域のために、1945年5月29日に反ナチズムの教師委員会が構成された。この委員会を創設した7人の構成員にモーリッツ・ネストラーも含まれていた。ナチズム体制に対して教職員がとった態度や、ナチズム体制に依存した更なる雇用、あるいは教職からの解雇に関する人間関係的考察の第一の結果は、1945年6月9日ないし27日の命令において市の行政当局によっても地方行政当局によっても問題にされた。それゆえにとりわけ、58名のケムニッツの教師たち—この教師たちは国家社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)にもそれに関連した組織にも所属せず、最初から反ファシズム的態度をとっていたことが確認されている—を含むリストがモーリッツ・ネストラーによって作成された<sup>13</sup>。しかし、教師採用がようやく具体的に確定するようになったのは、ドイツにおけるソビエト軍司令部(SMAD)の最高司令官が命令40号によって、1945年10月1日にすべてのソビエト占領地区における授業を再開するよう指示してからのことであった。この命令では次のことが確約されていた。すなわち、民主主義的理念を子どもの教育に適用し、ナチズムや人種論の反動的内容を明らかにし、かつてのドイツ帝国の軍国主義的性格を明らかにするのにふさわしい教師のみが、今後働いてもよいとされていたのである。それに基づいてザクセン地方行政当局は、1945年9月10日に「政治的信頼に基づく教師採用および学校教育再生の可能性」に関するドレスデン綱領を公布した<sup>14</sup>。国家社会主義的な組織や同盟で活発に活動していなかったあらゆる教師は、今後も雇用されることになった。すべての教育者は9段階に区分された。第1段階に該当する教師には、ナチ官僚によって解雇されたり、保護拘束もしくは自由刑を受けたりしなければならなかったあらゆる教師がいた。第2段階に分類された教師には、公務員制度の再建に関する国家社会主義の法律によって教職を追われたあらゆる教師がいた。第3段階に関連する教師には、ナチズム組織の非構成員がいた。第4段階に数えられる教師には、確かに国家社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)の黨員もしくはこの政党に関連する組織の構成員ではあったが、いかなる機能も果たさなかったあらゆる教師がいた。第5段階に含まれる教師には、わずかな機能しか持たない黨員であった教師がいた。第4段階と第5段階に属する者は新しい学校で教職につくことを禁じられており、とりわけ「思想・信条にかかわる授業(Gesinnungsunterricht)」をしてはならないとされた。最後に第6段階から第9段階には政治的指導者、すなわち高度に政治的・国家的な職務を持ったナチ親衛隊の構成員(いわゆるAlte KämpferやParteigenossen)が該当した。これらの段階に該当する者は直ちに解雇され、学校に入ることを禁じられた。1945年9月19日に、ネストラーは教育庁役人にドレスデン綱領に基づく教師選考の結果を報告した<sup>15</sup>。国家社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)の黨員であった教師の後任を(一時的に)補充しているにもかかわらず、1945年10月1日からの教育経営にはなお、莫大な教師不足が存続した。それゆえに国民学校の681クラスに対して、授業を行う教師はたった457人しかいなかったのである。同様に深刻だったのは、部屋不足である。国民学校の681クラスに対して、使える教室はたった319部屋しかなかったのである。1945年11月末には、ちょうど2ヶ月前に始まった教育経営の根柢が一般教養学校で揺らいでいた。というのは国民教育の部局も、ドイツ共産党(KPD)やドイツ社会民主党(SPD)の幹部も、後にはキリスト教民主同盟(CDU)やドイツ自由民主党(LDP)の幹部も、1945年10月においてドレスデン綱領に基づく人選結果に満足できなかったのである。反ファシズム的教師集団を作るための対策が強く求められた。そのような観点から、ザクセンの地方行政当局は1945年11月初めに次のような命令によって対応した。すなわち、国家社会主義ドイツ労働者党(NSDAP)に所属していたすべての教師は、政党における地位から独立していたとしても、ただちに教職から追い払われるべきであるとした<sup>16</sup>。

ナチズムを一掃しようとするやり方に、ザクセンの教育学者たちの心情は興奮が高まった。ナチズム期における教師集団の役割の評価や固有の過去とのかかわりへの問いは、個人的な問題や争いの火種を含んでいた。モーリッツ・ネストラーとカール・ルドルフは一人一人の校長と同様に、これに関してナチ独裁の間に授業をしていたほとんどすべての同僚たちを悪者に仕立てるという体験された実践よりもきめ細かな評価を要求した。このような校長たちは詳細に強力に訴えかけるように地方行政当局もしくは地方教育庁に相談した。そして彼らはこのような措置を取り消すよう要請した。というのは、彼らは経験のある教育学者による授業の防御や新任教員養成の担当に対して、深刻で否定的な影響が生じるのではないかと恐れていたのである。それゆえにフリッツ・ミュラーは1945年12月12日にルートヴィヒ裁判官養成学校の校長として教育庁役人のモーリッツ・ネストラーに、学校に割り当てられた14人の新任教員たちの養成教育が成功裏に開始されたことを報告していた。14人の新任教員たちはとりわけ、ヨハネス・キューネル

やハインリヒ・シャーレルマンやアドルフ・イェンセン／ヴィルヘルム・ラムスツスといった改革教育学者の古典的作品を研究しなければならなかったし、また啓蒙主義的教育学の代表者たちの著作、たとえばジャン・ジャック・ルソーの教育書『エミール』を読んで最終的にはケムニッツの実験学校（フンボルト学校／ベルンスドルファー学校）<sup>17</sup>の歴史にも取り組まなければならなかった。そしてその研究成果は研究報告会において同僚の前で発表することになっていたのである。さらに新任教員たちは、18歳から36歳まで年齢は様々であったが、聴いた授業についての報告書を作成し自分自身の教育実習に生かしていった。「残念ながらほぼすべての教師集団の教師が解雇されたため、幸運な道へと導かれていたあらゆる教師養成教育の措置は（新任教師の別々の会議を除けば）不可能になってしまった。新任教師への要求はとりわけ上級クラスの担任によって生じた。中級段階の上位や上級段階における方法論と問題機制への導入はこうした発展と歩調をあわせることができなかつたので、いつも緊張に包まれ、どうしていいかわからず過ちを繰り返していた。さらに新任教員たちの内部でたびたび配置換えがあつて、学校の時間割全体を何度も変えなければならなかつたため、新任教員が実務経験をつむことは困難であつた」と、ミュラーは解雇によって教育の基盤にもたらされた結果を要約している<sup>18</sup>。にもかかわらず、解雇が撤回されることはなかつた。行政機関による解雇の波は、われわれ教育庁役人に対してばかりでなく、ポツダム協定やザクセン担当のソビエト教育行政職員ドラーギンとマドウィヨーの確約にまで及んだ。1945年8月2日に締結されたポツダム協定の政治的原則に関するA段落第6項では次のように言われている。「通常以上にナチ党の活動に参加していたあらゆる党員および連合国の目的に敵対した他のあらゆる人々は、公職および責任ある地位から追放されなければならない。こうした人々は、政治的にも倫理的にもドイツにおける真に民主的な施設の発展に貢献できるように思われる人々と交代しなければならなかつた。」<sup>19</sup>ドラーギンとマドウィヨーの確約によれば、ザクセンの教育制度における脱ナチズム化の過程では、「教師が反ファシズムであり反軍国主義であることが保障されていなければならない」とされている。「問題は軍国主義者やファシストを除外することである。その際に注意しなければならないのは、国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）の党員ではないが、それ以上に憂慮すべき保守反動的な人々がいたであろうということである。国家社会主義ドイツ労働者党（NSDAP）の党員の多くは強制的に党に加入させられただけで、軍国主義者ともファシストともいえない可能性があるのである。このような教師は学校の課業に従事することができるので、このような教師を探し出すことが来週の課題である。」<sup>20</sup>このようなソビエト教育行政職員の要求は、教職員組合が1945年8月8日のソビエト軍司令部（SMAD）に宛てた文書にも強く確認され、次のように結ばれている。「それゆえにあらゆる教師は、ナチズムの活動家であるのか、生活困難ゆえに党やナチ親衛隊に強制加入させられ、やむを得ず党員になった者なのかという観点から個別に吟味されなければならない。」<sup>21</sup>

それに対して、わが国の教育庁役人は、断固として脱ナチズム化が実行されたことを示す実例となった。完全に無差別の脱ナチズム化によって、わが国の教育庁役人が抱いていた幻想、すなわちソビエト占領地区で民主主義を出発させるという幻想は激しい衝撃を受けた。そのことはフリッツ・ミュラーやヴァルドゥス・ネストラーやクルト・シューマンといった改革教育学者の伝記においてもすでに証明されていた。モーリッツ・ネストラーとカール・ルドルフは彼らの責任範囲において最初から個別に吟味することを望んでいたのである。

1945年以来適用された基準がつねに踏襲されうるとはかぎらない。ソビエト軍司令部による命令35号は1948年3月10日までに脱ナチズム委員会の解散を決定した。それによって、司法や警察や管理職を除く国立機関において通常のナチスの活動が再開できるようになった。

ザクセンでは徹底的に脱ナチズム化が行われた。とりわけ、局長ヴィルヘルム・シュネラー（ナチスによって殺害された共産党役員エルンスト・シュネラーの兄弟）やケムニッツの校長ヨハン・リースナーにはまったく譲歩の余地がなかつた。逆に、このような強硬路線の手法の背景を探った者は敵対者もしくは反動家とみなされた。たとえば、ドレスデンの教育庁役人マックス・コスラー（1882年生）は、1945年9月11日、12日にドレスデンで開かれた県教育庁会議で慎重かつ大胆に、教育者集団が過去にナチズムとどのかかわっていたのかをより綿密に調査するよう促したとき、ソビエト軍司令部の命令に逆らつて占領国を侮辱したという非難に直面し、深刻な結果を招いてしまった。それゆえに、コスラーは決してドレスデン東部の教育庁役人としては姿を現すことなく、後にソビエト軍裁判所によって、モーリッツ・ネストラーやカール・ルドルフとともに懲役25年の判決が下された。

同様の方法でリースナーはネストラーについても判断した。リースナーは1947年5月31日付けで「教育庁役人モーリッツ・ネストラーという人物」について次のように書いていた。「モーリッツ・ネストラーとともに、民主主義的学校改革者の敵が1945年5月17日にケムニッツの教育庁役人になることに成功した。ネストラーはドイツ共産党とドイツ社会民主党の統一の敵である。ドイツ社会民主党はドイツ共産党の学校政策とは一線を画していた。ドイツ共産党の学校政策はネストラーにとって、とりわけナチ教師の解雇と新任教師の任命においてあまりにも急進的であつ

た。ネストラーは教職から追われるべきナチ教師たちを共産党員が解雇に責任を負うものと解釈し、それに対して反感を抱くよう扇動する新任教師を支持しなかった。しかし彼は、自分の地位を隠蔽するために、公的には社会民主主義的学校改革に反対しなかった。]ヨハン・リースナーは党組織の役員として、民主主義的中央集権主義の名の下に全体主義的様式を保護した。そこでは下位機関に対して上位機関のあらゆる決議が絶対的に拘束力を持ち、もろもろの党派の形成が禁じられていた。

#### 4 新任教師養成教育の課題

厳しい粛清の結果—ソビエト軍占領地区ではおよそ2万人の教師が解雇され、そのうちの790人がケムニッツの教師であった—、新任教師養成教育が焦眉の課題となった<sup>23</sup>。1945年8月2日にケムニッツの国民教育省は興味深い労働者やその他の就労者たちに教職に志願するよう呼びかけた。新任教師として採用するための基準は、反ファシズム的信念、十分な一般教養、鋭い理解力、子どもへの愛情、そして授業の才能があるかどうかであった。1945年8月19日までに教職に志願した392人のケムニッツ市民のうち、188人がナチズムの時代に積極的に奉仕していたために拒絶された。適性試験を受けた153人の志願者のうち、86人が合格した。このグループにはさらに14人のアビトゥアー取得者が加えられた。選抜された100人の教師では1945年10月1日から実際に授業をするうえで必要とされる教員数には達しないため、引き続き9月17日にはさらに146人の新任教師が新たに募集された<sup>24</sup>。

新任教師獲得の文脈でモーリッツ・ネストラーとカール・ルドルフは、受験者の募集・選抜とともに新任教師の教育を行い、その一方で現代社会誌や改革教育学の講師を務め、しばしば歴史学的教育学の講師も務めた<sup>25</sup>。さらに彼らは、新任教師のための養成教育や継続教育における試験委員であった。幼稚園教諭や保育士のための養成・継続教育においても、彼らは同じことにかかわっていた<sup>26</sup>。

新任教師養成教育はまさに、教育の課題領域の主流となった。その結果、養成教育にかかわった教師グループからは多くの教育職員が輩出された。1946年初めにはケムニッツ国民学校の教師406人のうち、287人が新任教師であった。このような新任教師に資格を付与するために、ソビエト軍司令部（SMAD）は国民学校の教師養成教育を短期間のコースでおこなうことを定めた命令第162号（1945年12月6日付）によって、ケムニッツに新任教師養成学校を設立した<sup>27</sup>。

モーリッツ・ネストラーとカール・ルドルフが、教師の専門能力や教育能力に対する資格付与に全力を尽くしたことは、資料によっても時代の証人に対するインタビュー調査によっても確認することができる。彼らの努力がイデオロギー的プロパガンダ、とりわけ党の政策の狭隘化によって行われるようなことは決してなかった。にもかかわらず、ドイツ民主共和国（DDR）の歴史記述ではそのことがほとんど正当に評価されていない。それはちょうど、改革教育学の観点から新任教師養成教育を実施したフリッツ・ミュラー周辺の改革教育学者たちがほとんど正当に評価されていないのと同じである。しかし、そうしたことは驚くにあたらぬ。逆に、共産党の路線に忠実な新任教師養成指導員にこそ記念碑が建てられるべきであった。たとえ、ハインツ・メンデスのように、たった半年しか新任教師養成学校で働いていなくても、である。

#### おわりに

モーリッツ・ネストラーとカール・ルドルフは、1945年から1948年にかけての教育政策や教育学に新しい始まりをもたらした。とりわけ彼らは改革学校やモデル学校の設立を促した。こうした学校では就学前教育や学校外教育が全日制教育の提供という意味で統合されるべきであった。また彼らは、コア・カリキュラム・システムに対する情熱的な意見表明や地方の小学校を重視した改革の取り組みも行った。

しかし、ドイツ民主共和国（DDR）の歴史記述では、第二次世界大戦が終結した直後の困難な時代における教育部門での革新のプロセスがもっともな理由からまさに賛美されていた。つまり、たいいてい場合は、民主主義の時代の新しい始まりとして、熱狂に満ちた建設的意志が描かれていたのである。それゆえに、この時代をドイツ民主共和国（DDR）の用語によって「反ファシズム的で民主的な時代の始まり」と無批判に特徴づけるべきでないことは明らかなのである。

#### 付記

本稿は、ペーンケによってドイツ語で執筆された原稿をもとに、木内と大関が日本の読者向けに翻訳し、さらに加

筆・修正を加えたものである。

## 註

- 1 先行研究については以下を参照。

A. Pehnke: “Ich gehöre in die Partei des Kindes!” Der Chemnitzer Sozial- und Reformpädagoge Fritz Müller (1887–1968), 2002

–Botschaft der Versöhnung. Der Leipziger Friedens- und Reformpädagoge Waldus Nestler (1887–1954), 2004

–“Ich gehöre auf die Zonengrenze!” Der sächsische Reformpädagoge und Heimatforscher Kurt Schumann (1885–1970), 2004

–“Vollständig zu isolieren...!” Der Chemnitzer Schulreformer Moritz Nestler (1886–1976), 2006.
- 2 モーリッツ・ネストラーは1886年8月2日生まれ。1908年までアンナベルクの教師ゼミナールに通っていた。ケムニッツのルイゼン学校やジドニーン学校で物理学の実習を取り入れた授業を行い、その分野のパイオニアとなった。また、1930年にディースターベーク学校の初代校長として赴任するまでの数年間、ケムニッツのルイゼン学校やジドニーン学校で校長を務めた。ワイマール共和国時代は名誉職として、ケムニッツやエルツ山地で県の労働者福祉委員会の責任者となった。1920年以来、社会民主党（SPD）県支部の役員であった。
- 3 カール・ルドルフは1891年1月18日生まれ。1912年にドレスデンの教師ゼミナールを修了し、教師になった。1922年から1925年までグレーザ（ケムニッツの北方5キロにある工業の村。1930年当時の人口はおよそ3250人であった）の国民学校で校長を務める。1920年代の中ごろから、名誉職として、グレーザにおける指導者となる。1933年から1935年までは強制収容所で拘束され、さらに1942年にはゲシュタポによって拘束された。
- 4 Vgl. Pehnke 2006 (siehe Anmerkung1) sowie zu demokratischen & emanzipatorischen Reformpädagogiken: H. Neuhäuser & T. Rülcker (Hg.): Demokratische Reformpädagogik. Frankfurt am Main u.a. 2000. – Community Education–zu übersetzen etwa als *Gemeinwesenpädagogik*–ist ein breit gefächelter Ansatz, der außer Bildungseinrichtungen auch Institutionen und Aktivitäten der Erwachsenenbildung, der Sozialarbeit, der Sozial- und Kulturpolitik als Orientierung dient. Vgl. dazu M. Göhlich (Hg.): Offener Unterricht, Community Education, Alternativschulpädagogik, Reggiopädagogik. Die neuen Reformpädagogiken. Geschichte, Konzeption, Praxis. Weinheim & Basel 1997, S. 90–116.
- 5 Bericht Carl Rudolphs vom 19. Juli 1948 an die russische Militärkommandantur, Major Gorbatschew, in: Sächsisches Staatsarchiv Chemnitz, 30404, Nr. 1551.
- 6 Stadtarchiv Chemnitz 1945–90, Volksbildungsamt [wenn nicht anders ausgewiesen, dann beziehen sich nachfolgende Archivalien auf diese Signatur], Nr. 3913, Bl. 14..
- 7 R. Behring: Die Zukunft war nicht offen. Instrumente und Methoden der Diktaturdurchsetzung in der Stadt: Das Beispiel Chemnitz. In: A. Hilger & M. Schmeitzner & U. Schmidt (Hg.): Diktaturdurchsetzung. Instrumente und Methoden der kommunistischen Machtsicherung in der SBZ/DDR 1945–1955. Dresden 2001, S. 155–168, hier S. 158.
- 8 Moritz Nestler im Interview (1973), S. 6/7.
- 9 註の5を参照。
- 10 Stadtarchiv Chemnitz, Nr. 1251.
- 11 Ebd., Nr. 4463, Bl. 7.
- 12 Vgl. Petzold 1993, S. 88.
- 13 Vgl. Stadtarchiv Chemnitz, Nr. 1337, Bl. 15–18.
- 14 Vgl. ebd., Nr. 1204, Bl. 5/6.
- 15 Vgl. ebd. sowie Bl. 89–98.
- 16 Vgl. ebd., Nr. 3870, Bl. 77.
- 17 フンボルト実験学校については次の文献を参照。

A. Pehnke: “Ich gehöre in die Partei des Kindes!” Der Chemnitzer Sozial- und Reformpädagoge Fritz Müller (1887–1968), 2002.

A. Pehnke (Hg.) : Reformpädagogik aus Schülersicht. Dokumente eines spektakulären Chemnitzer Schulversuchs der Weimarer Republik. Baltmannsweiler 2002.

ベルンスドルファー学校については以下を参照。

A. Pehnke : Die Bernsdorfer Schule Chemnitz. Reformpädagogische Versuchsarbeit von 1912 bis 1933. In : Jahrbuch für Historische Bildungsforschung<sup>7</sup> (2001). Bad Heilbrunn / Obb. 2001, S. 191–214.

18 Stadtarchiv Chemnitz, Nr. 3776, Bl. 10/11.

19 Das Potsdamer Abkommen vom 2. August 1945. In : Potsdamer Abkommen und andere Dokumente. Berlin 1950, S. 13–24, hier S. 17.

20 S. Mebus : Zur Entwicklung der Lehrerausbildung in der SBZ / DDR 1945 bis 1959 am Beispiel Dresdens. Pädagogik zwischen Selbst–und Fremdbestimmung. Frankfurt am Main u.a. 1999, S. 69.

21 ebd.

22 J. Emmrich : Die Entwicklung demokratischer Selbstverwaltungsorgane und ihr Kampf um die Schaffung der antifaschistisch–demokratischen Ordnung in Chemnitz vom 8. Mai 1945 bis Mitte 1948. Dissertation, Universität Leipzig, 1974, S. 189. –Johannes Emmrich lag diese *Charakteristik* im Umfeld seines Interviews mit Riesner vor, sie ist leider nicht im Nachlass Riesners im Sächsischen Staatsarchiv Chemnitz enthalten.

23 Vgl. H.–U. Wehler : Deutsche Gesellschaftsgeschichte. Bd. 4 : Vom Beginn des Ersten Weltkrieges bis zur Gründung der beiden deutschen Staaten 1914–1949. München 2003, S. 957.

24 Vgl. Emmrich 1974 (siehe Anmerkung 28), S. 183/184 und S. 187.

25 Laut einer Anweisung des Dresdner Volksbildungsministeriums vom 28. November 1945 wurden “die bisher als *Laienlehrer* oder *Hilfslehrer* bezeichneten Lehrkräfte künftig als *Neulehrer benannt*” (Stadtarchiv Chemnitz, Nr. 3870, Bl. 106). Seit 1947 setzten sich die Bezeichnungen *Schulamtsbewerber* (ohne Lehrerprüfung) bzw. *Schulamtsanwärter* (mit Erster Lehrerprüfung) durch.

26 Vgl. Stadtarchiv Chemnitz u.a. ebd. und Nr. 3716, Bl. 42 und 54.

27 Vgl. G. Richter : Zu den Anfängen der sächsischen Neulehrerausbildung 1945/46 unter besonderer Berücksichtigung der Chemnitzer Neulehrerschule. Karl–Marx–Stadt 1987, S. 67/68. –Heinz Mende (1918–1984) wurde nach seinem Eintritt in die KPD nach Kriegsende zunächst Schulleiter, später Dozent und Leiter der Chemnitzer Außenstelle der Arbeiter–und–Bauern–Fakultät. 1959–69 war er als “Botschafter für den Frieden” Agent für die Hauptverwaltung Aufklärung (HVA) der Staatssicherheit in der Bundesrepublik tätig, wovon seine umfangreichen Berichte in elf Bänden (!) zeugen : BStU, AR2, 221105, F22 / HVA.

## **Sozialdemokratische Bildungstraditionen wurden 1948 im Osten Deutschlands vollständig isoliert.**

Yoichi KIUCHI\*, Andreas PEHNKE\*\* and Tatsuya OZEKI\*\*\*

Aus dem Kontext eines Forschungsprojektes, mit dem Lehrerschicksale aufgearbeitet werden, die in den deutschen Diktaturen des vergangenen Jahrhunderts gemäßregelt und/oder ausgegrenzt und in den Demokratien vergessen und nun wiederentdeckt werden, soll an dieser Stelle an exemplarisch ausgewählten Fallbeispielen die Entlassungspraxis von zwei sächsischen Schulräten illustriert werden: Moritz Nestler (1886–1976) und Carl Rudolph (1891–1955), die neben dem Verlust ihres Berufes 1948 im darauffolgenden Jahr sogar noch den Verlust ihrer Freiheit durch die Verurteilung zu jeweils 25 Jahren Zuchthaus durch ein sowjetisches Militärtribunal hinnehmen mussten.

Diese Maßregelungspraxis steht beispielhaft dafür, dass die Erfahrungswerte der alten, in der ersten deutschen Republik erprobten Schulfunktionäre am Beginn der ostdeutschen Erneuerungsbestrebungen unmittelbar nach Kriegsende zunächst noch geradezu heiß gefragt waren, deren Vertreter dann aber mit zunehmender Diktaturdurchsetzung seit etwa 1948 nicht mehr als Nonkonformisten in Führungspositionen beim Aufbau der so genannten sozialistischen Bildungslandschaft passten. Die sozialdemokratischen Bildungstraditionen wurden geopfert, um eine stärkere Rezeption der stalinisierten Sowjetpädagogik der 1930er Jahre zu ermöglichen.

Das Schicksal der ausgegrenzten sozialdemokratischen Bildungsexperten verdeutlicht auf beklemmende Weise, dass in der unmittelbaren Nachkriegszeit in der Sowjetischen Besatzungszone (SBZ) schon früh der Meinungs- und Gesinnungsterror um sich griff, während ein Großteil der Bevölkerung noch an den antifaschistisch-demokratischen Aufbau eines demokratischen Staates glaubte. Die doppelte Ausgrenzung durch zwei Diktaturen macht diese biografischen Skizzen zu eindrucksvollen Beispielen für ein Leben im Widerstand gegen Ideologie und Unrecht.

---

\*Human Development, Naruto University of Education

\*\*University of Gleifswald

\*\*\*Hyogo University of Teacher Education